2021 年　第 8 回　都市環境デザインセミナー
テーマ　「風土建築」からグルーバル化のなかの地域環境を考える」

＜趣旨＞

防災面でもエネルギー面でも「自然との共生の必要性」が叫ばれるが、現実の都市では、「ハイテク・ロボットシティ」とでもいえる環境が増殖している。JUDI 関西セミナーの懇談会でしばしばこのことが話題になった。そこで今回は、＜風土建築＞をテーマに取り上げることにした。

土着性の高い伝統住居、「風土建築」は、「在地資材、伝承技術、共同労働」の 3 つの要素により建設・維持されてきた。小林広英氏は、これを時代遅れの過去の産物としてではなく、過度にグローバル化が進んだ現代社会において見直されるべき存在ととらえている。氏の豊富な海外調査に基づく知見をうかがい、意見交換をすることとした。奮ってご参加ください。

世話人　鳴海邦碩・岡絵理子

＜日時＞2021 年 11 月 26 日(金)　18:30～20:30

＜会場＞グランフロント大阪ナレッジキャピタル「都市魅力室」

（大阪市北区大深町 3 番 1 号グランフロント大阪　北館 7 階）

＜参加者＞　23 名

会場参加；　会員 7 名、一般 2 名、学生 4 名　計 13 名（登壇者除く）

Zoom 参加；　会員 3 名、一般 6 名、学生 1 名　計 10 名

＜講師＞

小林　広英（こばやし・ひろひで）

1992 年京都大学修士課程修了(建築学専攻)、同年マンチェスター大学奨学生。1993 年より設計事務所勤務。2002 年の京都大学大学院地球環境学堂設立とともに、人間環境設計論分野の助手として実践的研究活動を開始。地域に根ざす設計技術・地域に根ざす人間居住のテーマに取り組み現在に至る。2018 年より同大学院教授。

「風土建築」からグローバル化のなかの地域環境を考える

小林　広英（京都大学）

私は現在京都大学大学院地球環境学堂に在籍し、風土建築の再建プロジェクトなど実践的研究に従事しています。研究室のコンセプトは、『変容著しい現代社会において、地域の文化や風土から持続的人間環境のあり方を追求する。美しい自然から災害を起こす自然まで、多様な姿で示される地球環境の実相と、それらに対応してきた持続的な人間環境の構造を、実際の都市や集落から学ぶ。そこで得られた知見や知識を施策、計画、デザインとして具現化し実践的な社会適応を試みる』というものです。

本日の講演内容もこれに関するもので、タイトルを『「風土建築」からグローバル化のなかの地域環境を考える』としています。風土建築というとどうしても過去のものとして捉えがちですが、私が取り組んできた再建プロジェクトは、ここ 10 年間におこなってきた同時代的な出来事です。私たちが生きている現代社会に立ち現れるこの風土建築がどのような意味をもつのか、また現代社会にどのようにフィールバックされうるのか、そのようなことをグローバル化とローカリティという視点を中心に、これまでの実践活動について紹介したいと思います。

私の研究室では、これまでアジア・太平洋地域で木造文化と在来建築技術や、自然災害と居住環境に関するフィールド調査を行っており、その中でたまたま再建プロジェクトに関わるような機会を得てきました。市場経済の浸透や価値観の変容というのは、調査地である海外辺境地の集落においても既に日常化しています。このような状況下、地域アイデンティティを表象するような風土建築の類いは消滅の危機にあります。1960～70 年代に世界的にトタン材が普及しますが、これを可能としているのが金銭で売り買いできるマーケットの存在、市場経済の普及です。各地の集落でヒアリングをしていると、伝統住居を建設しなくなった時期にほぼ重なっています。西アフリカでフィールド調査をされていた文化人類学者の川田順造氏も、1970 年代のブルキナファソでトタン材がどんどん普及していく様子を記述されています。このような生活環境が変化する中で、風土建築の重要性を認識し、その再生を望む集落のキーパーソンと呼ばれるような人と出会ったときに再建プロジェクトは始まります。プロジェクトの主役はもちろん集落住民で、それをサポートするのが私たちの役割です。

最初の再建プロジェクトは、2007 年に地球環境学堂と地元の大学が共同して取り組んだ JICA 草の根事業によるベトナム中部の少数民族カトゥ族集落の生活向上支援の一環でおこないました。その後、2011 年にフィジー適正技術開発センターと共同、2014 年に南部タイの海洋少数民族モクレン族の人たちと、2017 年はバヌアツ・タンナ島で JICA 草の根事業による伝統住居をベースにしたサイクロンシェルターと

して建設をおこないました。そして、再び 2018 年にベトナム・カトゥ族の伝統的なコミュニティハウスを再建に取り組み、15 年くらいの間に 5 つのプロジェクトを経験してきました。。

先ほど集落のキーパーソンの話をしましたが、本当に示唆に富むメッセージを私たちに送ってくれます。ベトナム中部少数民族カトゥ族の村長タンさんは、再建プロジェクトで伝統的集会施設を建設した時、「これは我々の家です」と表現されました。私の家ではなく我々の家。ベトナム戦争後三十数年間建てられることがなかった伝統的な集会施設を指して言った言葉です。

フィジーでは共同した政府役人のボラさんが、「フィジーの伝統建築ブレは我々の伝統文化であるが、その時代の社会的要請に応じて変容し、適応することが継承につながる」と言い、生きた建築としての発展的継承の在り方を示すわけです。

タイの海洋小民族モクレン族の長老のサさんは、「わしが死ぬ前にもう一度伝統建築を建てることができてよかった」と建設機会を通して伝承される在来の知識や技術の重要性を強調されました。

バヌアツの大工リーダーのジミーさんは、「私たちの伝統住居ニマラタンは、より耐災害性を向上し、現在の生活に役立てたい」と、フィジーのボラさんと同じく伝統住居の発展的継承、現代的意義の必要性を言いました。

再び、ベトナム中部少数民族カトゥ族です。アカ集落の住民全員が、資材収集と建設に協力することを約束したと伝えました。これは市場経済が浸透してお金をベースとした生活において、労働提供に時間を割くという大きな判断を集落全体でおこなったということを意味します。

このようなキーパーソン達のメッセージを聞くと、例えば、この市井三郎さん（社会学者）の『新しい伝統が創造されるのは、一次的な旧伝統が定例化・形骸化して、新しい社会的諸条件に対処しえなくなった状況のなかから、二次的な伝統として（つまり旧伝統の新しい形態での復興というかたちをとって）あらわれる』のだということを思い出します。また、鶴見和子さんの『内発的発展論の展開』で、地域社会のキーパーソンを地域の小さき民と見立て、内発的発展の研究を小さき民の創造性の探求としたという同義の出来事と感じました。彼らの示唆に富むメッセージを聞いたときに、ぜひ一緒に協力してやりましょうということで再建プロジェクトが始まりました。

その中でも、最初にプロジェクトを行ったベトナム中部少数民族カトゥ族の伝統集会施設の再建についてご紹介したいと思います。このプロジェクトは、京都大学地球環境学堂と現地のフエ大学による JICA の草の根事業「ベトナム中部自然災害常襲地での暮らしと安全の向上」を沿岸部集落、平野部集落、山間部集落のパイロット地域のうち、山間部で実施した支援活動の一つです。

山間部集落ではホンハ村が対象となりました。何ということもない、のどかな農村風景が広がる集落です。集落人口は約 1300 人で、カトゥ族が 65%、タオイ族が 30%、キン族が 5%パーセント、バンキ

ュウ族が 1 世帯という構成になっていました。しかし、通常少数民族は単一で村を形成するのに、なぜカトゥ族、タオイ族、キン族など色々な民族が一緒に住んでいるのだろうと素朴な疑問をもち、ヒアリングを行いました。するとやはりベトナム戦争が関わっているわけです。ベトナム戦争の激戦地であったこの地域で元々の集落が離散し、戦争後に社会主義体制のもといくつかの集落が集合し現在のホンハ村ができあがったのです。

その後、定住定耕政策（焼畑農耕から水稲農耕へ、高床住居から地床住居へ）により大きく生活様式が変わり、新たな集落構築に忙しく、戦争による森林資源の劣化もあって、自分たちの伝統建築を建てる機会がありませんでした。また、コンクリートの建物の方が現代的で富の象徴になるという価値感が大きく影響していることも挙げられます。

JICA プロジェクトでは、当初自然災害常襲地での暮らしの向上ということで、洪水災害に対する避難施設をつくろうというのがありました。これが本来のプロジェクトの目的だったわけです。ここでは最初コンクリートブロックやトタン等の汎用材を使って提案しました。村長のタンさんや前村長のナムさんにこの案を示すと、彼らは苦笑いしてほとんど関心を示さず、外に出てナイフで竹林から竹を切り出し、伝統的集会施設の模型を器用に作り始めたのです。そして、これを避難施設として使ったらどうだという逆提案を受け、再建プロジェクトが始まりました。

まず、柱となる鉄木（アイアンウッド）を集落から 2 日歩いて伐採し、一本ずつ水牛で集落に運びました。長老衆たちは簡易な斧で器用に柱丸太を加工していきます。建設前には日本と同じように地鎮祭を行うため、長老衆が集まって土地の神を鎮め、木に宿った神が無事に森へ帰っていく儀式をします。それが終わるとどこからともなく集落住民のほとんどが出てきて、主要構造体の建方を 1 日でおこないました。

釘は 1 本も使いません。ラタンの茎皮を紐状にしてどんな部材も強く固定していきます。棟頂部は日本の棟木を上下に設置し、その間に屋根梁を差し込み 2 本の棟木を絞りながら結ぶことで強固な接合部をつくります。簡単だけれども技術的に高度です。これは、白川郷の合掌造りでも同じような納まりを見ることができます。

屋根葺きも合理的です。ヤシの葉をユニット状にまず組んでから、丸竹に滑らして持ち上げ早くかつ正確に葺いていきます。最後に長老衆の 1 人が棟飾りを付けて建物が完成します。次の日に完成式の儀式を行ってプロジェクトが完了しました。ところでこの伝統的集会施設は、どれくらい費用がかかったと思いますか。

C－　外から何か仕入れてくる材料費ですよね？ゼロじゃないですか？

小林　そうです。費用は 0 円です。いつも授業で同じ質問をするのですが、大体 1,000 万円とか 2,000 万円とかいう答え返ってきます。やはり、私たちはお金

をベースとした生活に慣れてしまって、金銭的な価値で物事を判断しがちになっていると思います。実際には約 30 万円かかかりました。これは、完成式に必要であった生け贄の水牛購入費だったわけです。

このような風土建築の再建プロジェクトを実施して、その完成していくプロセスを実際に見ると様々な側面でその重要性を認識します。一つは、再建によって技術の継承機会を提供できたということです。30 数年ぶりの再建ということで在来建築技術を知る世代がまだ健在でした。ベトナム戦争の終結が 1975 年ですから、建設経験を有する人がまだ 70 歳ぐらいで健在でした。これがあと 10 年間何もなかったら、静かにいつの間にか消滅していたかも知れません。今回、建設機会を通して若者たちがそれを受け継いでいくという機会を得ました。風土建築の面白いところは、建築技術だけでなくて様々な在来知識を得るところにあります。例えば、山に木を切りに行く途上で薬用や食用の植物知識を得たり、森林資源の多くの活用法を学んだりします。また建設の各ステップで伝統的な儀式をおこないます。このように、建設プロセスの中に様々な地域文化が内包されているわけです。それを強く感じ、やっぱり重要な活動だと改めて思いました。建設後に実測調査をおこない建設プロセスと共にまとめ、次世代の参照テキストとしてベトナム語で出版し、行政機関や周辺地域に配布しました。ホンハ村では、建設後に若者たちが伝統的織物・舞踊を習い始めます。これは現在も続いている活動で、建築の力を感じます。

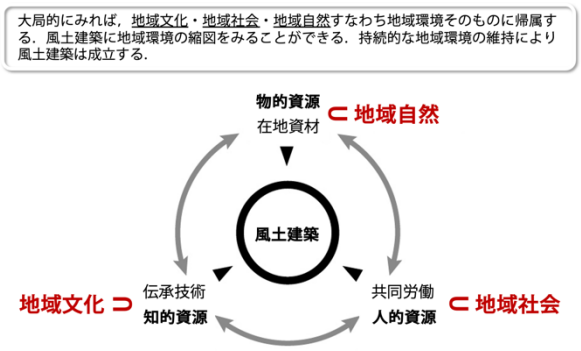
また、2007 年の完成後 7 年がたち住民達はここに Wi-Fi カフェをオープンします。伝統至上主義者の人が見れば、これはけしからんとなるかも知れませんが、私はこれをみて良いなと思いました。現代の集会スペースとして WiFi カフェに沢山の人が集まります。その後、周辺の美しい自然を楽しむためのエコツーリズムを住民主体で始めて、この施設に宿泊機能が追加されました。伝統的集会施設を保存物として扱うのではなく、生きた建築として日常の用途にうまく使っています。

2018 年には、アカ集落という別の地域でも再建プロジェクト行いました。風土建築の再建事例をひとつずつ作っていくことも重要ですが、ここでは政府・大学の関係者、集落の有志とチームを組み、木材伐採許可の取得、村人たちのワークショップ、そして再建時における子供達の見学機会提供という活動を、持続的に周辺地域に広げようと計画しています。
これは、現在コロナで中断していますが続けていきたいと思っています。

これまでの経験を通して、これが本日の一番の要点ですが、風土建築を成立させる三つの地域資源というのを整理できると思いました。風土建築は、伝承技術、共同労働、在地の資材、この 3 要素を動員して建設、維持、継承される。これらの 3 つの要素は、知的資源、人的資源、物的資源にまとめられ、各資源が相互に連環していると言えます。つまり、森林資源や里山の資源がコミュニティに恵みをもたらす。集落のコミュニティが世代間伝承によって知恵、技術を伝える。在来の知恵や技術により、森林、里山の資

源を有効かつ循環的に利用するということです。

もっと大局的に見れば、知的資源は地域文化、人的資源は社会、物的資源は地域自然と捉えることができ、これは風土建築を建設できるということは地域環境が健全ということであり、地域環境が健全であれば風土建築をつくることができる、そういう相互の成り立ちとして整理できたというのが、本日の中心的な話題です。



しかし、再建プロジェクトの周辺ではコンクリート製の疑似伝統集会施設がいっぱい建てられています。外観は似ていますがその成り立ちを考えたとき、在地資材は新建材、共同労働は施工者請負、伝承技術は産業技術というように全て外部に依存しています。

この市場経済を前提に成り立つコンクリート製の集会施設をみたとき、建っている場所も地域固有性を失い土地という物理的な事象になっているように感じます。これをローカリティとグローバル化という観点で捉えたとき、それはそのまま現代の私たちの生活や住んでいる都市につながると思います。

しかし、集落においてもローカリティの脆弱性とグローバル化の浸透が見られます。風土建築のような地域文化というのは綿々と受け継がれてきた生活そのものであり特別なものでなく、その在来性故に自分たちでは価値を把握しづらいものです。ですから、外部者である私たちの役割は、地域文化は現代においてもまだまだ必要なところがあるという視点を提供することと思い活動しています。

余談となりますが、再建プロジェクトを行った時に、知的資源としての在来設計技法に関心がありました。私たちは通常図面を描いて建物を建てますが、集落の長老衆は全く図面を用いません。岡先生、彼らはどうのようにして、部材や形態を決めていくと思われますか。

岡　部材の寸法でしょうか？

小林　ホンハ村での建設途上で、軒出の寸法が実測95センチぐらいでしたが、村長のタンさんにどのように決定するか聞いていました。するとタンさんが肩からふくらはぎまでの寸法を小枝で計り取り「トゥーチャラントゥックピレチェルン（肩からふくらはぎまで)」と言いました。身体尺を使っていました。その後、5人の長老衆の人に集まってもらい、身体尺に関するインタビューをおこないました。これはその時の写真とビデオです。

(映像)

小林　この方、前村長のナムさんですね。体の中心から手の先までを指し示しています。

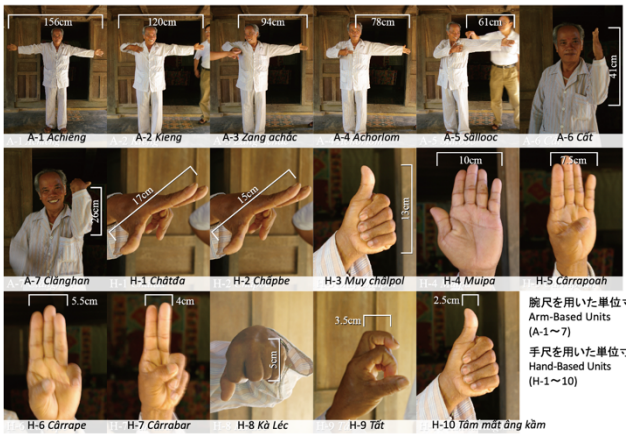
(映像)

小林　これをサロックと言っています。

(映像)

小林　何回か長老衆に聞き取りを行い 17 種類の単

位身体尺を持っていることが分かりました。ホンハ村以外の集落でも調査を行いましたが、大体同じような単位身体尺の種類と名前を持っていました。



フィジーやタイでの調査でも 7 種類の単位身体尺がありました。その後 2013 年から 2015 年に実施した西アフリカ・ブルキナファソ、カッセーナ族の土の建築でも身体尺を適用しているのか大変興味がありフィールド調査を行いました。土の建築でも身体尺があったと思われますか。

C－　あったと思います。

小林　はい、ありました。何種類あったと思われますか。

C－　1 種類だけですか？

小林　はい。このスライドにありますよう、体の真ん中から手の先まで。このジェスチャー（体の中心から手の先まで）は、さっきのベトナムのケースと全く同じです。彼らはこの寸法が 1 歩分と同じ長さとし、男性の四角い住居は 3×5 歩、女性の 8 の字住居は直径が 3 歩と 4 歩の組み合わせでつくられることが分かりました。

身体尺が 1 種類ですので、高さ方向はどのように寸法決定しているかを調べますと、壁は泥団子で積み上げていきますので、その積み上げ個数で決めます。考えてみると泥団子は手で丸めて作りますので、手の尺度が泥団子に写しとられているとも言えます。これで、自ずと高さ方向が決まっていくということが分かりました。

もう一度、地域に根ざす建築に関してグローバル化する社会のローカリティという視点で整理したいと思います。再建プロジェクトをしているとやはりローカリティの重要性を再認識します。これに関連して、内山節さんの『半市場経済　成長だけでない「共創社会」の時代』には、市場経済一辺倒の生活から脱却し、半分はこれまでとは違う価値観の中で生きていくべきではないかと言っています。川上浩司さんは、「不便益」っていう言葉をよく使われて、効率化や合理化の世の中に「不便益」という要素を入れていくと、実は色々な新しいことが見えてくるという、効率性一辺倒からの脱却ということを示されています。不便益なプロセスとしてわざと遠回りすることに意味があるという発想で、ローカリティの文脈に重なってきます。

建築でローカルというとマイナーなイメージがありますが、これからの社会にもっと重要な役割となっていくのではと思います。海外辺境地の再建プロジェクトは私たちの同時代の出来事であり、私たちの都市におけるローカリティはどのように可能なのか、まだ明確に整理できているわけではありませんが、これまでの拡大成長社会から次のフェーズに移

る時代のヒントであることは間違いないと思います。都市の中で市場経済原理から外れる場所や物（例えばコモンズやアソシエーション）、あるいは都市のガバナンスからある程度自由な場所や物（インフォーマルな空間、都市の余白）に関わると思います。ローカリティは、グローバル化がもつ無境界、ボーダーレスなものではなく、ボーダーのあるスケールを持つ場所として理解できます。

このような思いをもって取り組んでいるデザインプロジェクトを紹介します。放置竹林の資材を活用したセルフビルドの竹構造ハウス「バンブーグリーンハウスプロジェクト」です。これを風土建築の三つの地域資源で捉えると、地域住民によるセルフビルド（人的資源）、簡易技術による製作容易性（知的資源）、放置竹材の竹林の竹材利用（自然資源）となります。

放置竹林は、獣害などを引き起こし全国で大きな社会問題になっています。これをバンブーグリーンハウスによって、地域の営農振興や里山環境を改善していこうという少し大きな理念を掲げて活動しています。

2009 年から始めて 10 年以上経ちますが、2009 年のバンブーグリーンハウスは、グッドデザイン賞サスティナブルデザイン賞を受賞しました。その後、いくつかの改良を加え、2015 年に現行タイプを完成させて現在普及活動をしています。

2015 年頃から普及活動を行って現在までに 30 棟以上が地域の人たちにセルフビルドされています。Facebook も開設して 2000 人以上の人に参加してもらっています。また、製作マニュアルも作って配布したり、ワークショップを企画するなど様々な普及活動を行っています。

Facebook 参加者の動向を調べてみたのですが、昨年のコロナの緊急事態宣言以降、参加者が急激に増えています。一気に 2000 人を超えるのですが、これはコロナ禍による在宅ワークとかステイホームなどの生活変化により、自分の身の回りの環境により関心が高まっている結果とも思いました。ローカリティへの価値移行の動きが始まっているかも知れません。

このバンブーグリーンハウス活動に関連するプロジェクトとして、里山と共生する建築プロジェクト、たねや農藝というのがあります。「たねや」さんは和菓子・洋菓子の会社で、その施設に店舗の季節を彩る山野草の鉢植え施設を造るというプロジェクトでした。人的資源として、企業のスタッフ方々により様々なワークショップするなど、人々を巻き込んでつくっていく建築としました。また知的資源は、完成する建築は山野草を扱うということもあり、自然力を生かすようなパッシブデザインの手法を適用しています。自然資源については、在地の里山資源である山野草や竹材を利用して草屋根や自然舗装に利用しました。

竹材については、計画敷地裏の里山にあった放置竹林から調達しています。たねやさんのスタッフの方々このプロジェクトをきっかけに現在も竹林整備

活動を行っておられます。すると、近隣の人たちがきれいになった竹林沿いの道路を散歩するようになり、理由を聞くと「竹が風でさわさわと音を立てるのがすごく気持ちいいんです」と言うような人も現れ、周辺環境との連環でつくられる建築の役割を顕著に示していると思いました。このような感度をもってこれからも建築に携わっていきたいと思っています。

＜質疑応答・意見交換＞

質問者１：田中（京都工芸大学大学院生）です。本日はすごく貴重なお話をありがとうございました。私も集落に入って、海外の集落で調査などしているのですが、先生もいろいろなところに入っておられるようですね。初めはどのようにして集落に入り込んでいくのかというところがすごく気になっています。私の場合は、もともと教授が集落とつながっておられるから入れるんですけど。集落にはどういうふうにして入られるのですか。

小林：やはり、いきなり集落に飛び込んでいくというのは、基本的に難しいですね。すごく時間をかけてやっていきます。再建プロジェクトをおこなったベトナムのホンハ村は、JICA 草の根事業を共同した地元フエ大学調査地でもありました。そのような縁がきっかけとなりましたが、集落に入って最初の 1 年間は具体的な活動を行うというより集落住民の方への聞き取りや現地を知る作業に費やしました。

岡（JUDI 会員）：一番初めのところに、トタンが出てきて・・・、という話がありましたよね。風土建築といったときに、その時代の一番入りやすい材料というのも風土的材料じゃないかなと思っています。トタンが一番手に入りやすい材料であれば、トタンで作るというのもある意味、ありかなと思うのですが、その点はどのようにお考えでしょうか。

小林：ある意味トタンは万能材と言えます。市場では大変安くて、波形に加工するだけで簡単に作れ、止水性も確保します。西アフリカ・ブルキナファソ、カッセーナ族の集落でもトタンの家が増えてきていますが、日中は内部が度ぐらいになって大変暑くなります。このような居住環境がなぜ受容されるかというと、集落の人たちが従来の農作業を捨てて、街に働きに行くというライフスタイルの変化とも関係しています。街で働くということは、日中集落に不在で夕方に帰ってきます。トタンの家は、夜には放射冷却で温度が下がり寝るだけのスペースとしては成り立ちます。あるいは、ほとんど外部で就寝することも考えられます。トタンの普及はある意味在来化した材料とも捉えることができますが、一方で住居の建設プロセスを考えたとき、その途上で関わる地域資源や文化的な事象については全く異なってきます。

岡（JUDI 会員）；そのような資材を受け入れたところから私たちの街が今の姿になっているのだと思います。今でしたら、日本の木材を使うよりも輸入材を使う方が安いと言った状態で、そういうところから今の日本の街の姿というのができているのかなというふうに思いました。

井口（JUDI 会員）：トタンの話はぴったりですね、この話題に。本当にそう思います。先生の話を聞いていて、風土建築のキーポイントは材料だなと思う。トタンはまさにそうですけども。材料が変わると、職人も技術も変わるし。技術が変われば、仕事を受ける人間も変わってくるということで。結局、都市の在り方、建築の在り方が変わる一番の元はなんだというと、材料じゃないかと話を聞きながら思いました。これは産業構造みたいなものに通じている、まさに市場経済そのものを経てきているわけだから、末端に居る僕らはコントロールできない。私は設計する立場で施工面も分かりますけど建築の現場は基本的には受け身で、産業構造をコントロールできないんですよね。きょうの風土建築の話を聞いていて改めて自覚したのですが、我々がコントロールできない、流れに逆らえない弱い社会というものが歴史的にあって、ベトナムがそうだとか言うんじゃなくて、100 年前、150 年前、まさに日本がそうだったわけです。今それまでの土と紙と木の材料を全部捨てちゃって、今になっているわけですよね。まさに僕らは弱い立場でそうなってきた。そう考えると、われわれを弱い立場にしたヨーロッパはどうか。大きな街の高層建築は別にして、地方に行くと大体 2 階建て、3 階建て、高くても 5 階建て。要するに、ヨーロッパは今でも風

土建築をやっているわけですよ。途上国のベトナムが何だかんだではなくて、一番の先進国が風土建築をつくってるんですよ。そう考えてくると、われわれは新しい風土建築を作るしかないのかなと思いますがどうでしょうか。ベトナムのトタンの話をされましたけど、それが今のわれわれの参考になるというのはちょっと難しいなと、話を聞きながら思いました。ベトナムのトタンのように職人の手仕事合うプリミティブな材料を我々は使っていない。出来るだけ職人を必要としない、マスプロダクトする建築用の材料しか使わない。それでもって我々は日本の風土建築を今から作るしかない。でも、それは出来ないかもしれない。不可能かもしれないと思いながら聞いていました。

小林；全面的に風土建築を参照することは難しいと思いますが、地域資源との関係の中で有効な要素を捉えて適用するというのはあり得ると思います。市場経済をベースにした都市の中で、無理解に参照するのではなく、イメージ的にはあるスライドでお見せしましたとおり、都市の中でも市場経済の関わらない場所や価値があると思います。そこにエネルギーを注入し、都市の中で存在要素としてつくっていくことが重要と思います。

西（JUDI 会員）：京大の建築出身です。私の田舎は熊本県の人吉市というところです。同級生が重要文化財に指定された建物の旅館を経営しており、構造的には大丈夫だったのですが、実は一番大変なのが土壁らしいのです。たまたま重要文化財に指定されているので、工法を変えちゃいけないらしいんですね。土はあるんですけど、土壁の職人がいなくて。きょうのお話を聞いて、日本でそういう特殊な例であっても、どうするのかなと思って考えてしまいました。感想でございます。

小林：文化財は専門ではありませんが、今日の風土建築を支える三つの要素、自然資源、人的資源、知的資源にもつながる話だと思いました。
私から皆さんにコメントをいただきたいのですが、本日の私の話題と、皆さんがご専門とされている都市環境デザインと関連について、皆さんがどのように関連付けて理解できるかということです。いかがでしょうか。

井口（JUDI 会員）：現代の都市と風土建築というのは、対極にあるようなものじゃないかと思います。~~それ~~最近できる建築や都市をつるつる、ぴかぴか、ぺらぺらと僕は感じてしまいます。今の都市はみんな清潔で綺麗で、しかも真新しい。つるつるしてる、ぴかぴかしてる。結果的にぺらぺらだと僕は思えてしょうがないんです。僕はその、つるつる、ぴかぴか、ぺらぺらになるのは、先ほど申し上げました、材料次第ですよね。小林先生が、あの建物を造られたとき、鉄の部分をさびるように、エージングを大事にしたとおっしゃって~~。~~素晴らしいなと思いました。つるつる、ぴかぴか、ぺらぺらにはエージングがないですよ。つまり材料にエージングするものが使われないんですね。エージングの良さというのは、きょう会場の方に、若い方が多いから聞きたいんだけど、エージングの良さって知ってますか、というか、何か感じますかと思うんですよ。小林先生は先ほど、エージングという言葉を使われたので、ちゃんと風土建築のポイントを抑えられてると思うんです。小林先生よりももっと若い人にぜひ教えて欲しいです。

質問者 2：原と申します。建築設計をしております、30 歳です。いつもつるつる、ぴかぴか、ぺらぺらの建物を作っておりまして。20 世紀の初めのコルビュジェとか、あの時代のかたがたの夢だったものが今、実現していると勝手に思っています。当時はヴァナキュラーなスタイルから統一する建築理念みたいなものを夢、描いていた時代があったんですけど。今、ヴァナキュラーなものに返り咲こうとしていて。波の中にあるのかなというイメージでいるんですけれども。

感想ですが、これからどうしていくべきなのか、何となく思っているところがあって、そんな思いでいつも設計しています。なので、エージングもどんどん使っていきたいなと思っていますし、一方でぴかぴかなものを、対比とかをうまく使いながら、やっていきたいなと思っています。

小林：エージングの話はヴァナキュラー建築とも深い関わりがありそうです。たねや農藝のプロジェクトでも、鉄部は素地のままとして、木壁や草屋根と共にエージングしていくこととしました。その提案をたねやの山本社長が賛同され実現しました。ペンキを塗って状態を維持するよりも、このプロジェクトでは、建物の他の部材や周辺の里山環境との連環を見据えて変化していくことが良いと判断されたわけです。このような価値を許容するところは、まさに風土建築のあり方に共振します。

井口（JUDI 会員）：ベトナムの話なんですけど、JICA のことで行かれたんですよね。プロセスが大事だという話に関わるんですけども。JICA がなかったら、あの話はないんじゃないかと。つまり、地元からまいた話じゃなくて、こっちから持ち掛けた話ですかね。それをちょっとお尋ねしたい。要するに、こっちから仕掛けて作った話であって、行かなかったら何も起きなかったということでは日本の補助金便りの地方創生も一緒ですけど。それを風土建築の施工事例といっていいのかなという、そんな疑問を持ちながら聞きました。すみません、こんな嫌な質問で。
小林：はい、私たちが行かなかったら何も起こらなかったと思います。

井口（JUDI 会員）：世界中、そうだと思います。

小林：そうですね、世界中そのような状況だと思います。風土建築は文化財でもなく住民の生活そのものですので、知らないうちに静かに無くなっていくと思います。しかし、再建プロジェクトで見た様々な豊かな技術を継承していくことはやはり大事だと思います。再建プロジェクトは風土建築の建設機会を提供して、特に若い人が経験せずに無くなってしまうのではなく、経験した上でこれを残そうとか、やっぱりこれは要らないという地域文化継承のプロセスがあった方が良いと思っています。。

井口（JUDI 会員）：よく分かりました。ところで、ヨーロッパは風土建築をずっとやっているんですよ。明治になって日本は風土建築じゃない方向に行っちゃうんですけど、ちゃんと風土建築をやっている国が、しかも先進国の中であるんだということに今日の話を聞きながら気づきました。ヨーロッパは社会の仕組みもコミュニティーの仕組みも、全部それを支えてるんだと。先ほどコルビュジエらの近代建築がこういうことをもたらしたという話がありました。それは正しいんですけども、ヨーロッパはそれをずっと以前に方向転換しているんですよ。1970 年くらいからヒストリックセンターを中心にしたポストモダンのまちづくりに軸足を移しました。そして全然別の道を歩いている。だから、風土建築が残っているんです。日本が同じことをできるかというとさすがに今更難しいけども、そのことは知っておかないといけない。ちゃんとした先進国が風土建築でやっている、エージングを楽しんでいるんだと。しかもそれは材料のエージングだけじゃなくて、都市のエージングもやっているんですよ。都市のエージングを尊重しているんですね。そういう価値観を知るきっかけに、小林先生の仕事ががぜひなってほしいなと思います。

小林：私も同感です。アジアのモンスーン気候に合うような、つまり木造建築をベースとして現代都市において、どのようなエージングの作法があるか、技術や価値づくりも含めて考えていく必要がありそうです。

＜総括＞　鳴海邦碩

簡単に感想を含めて。だいぶ前になりますが、ある大学の新入生にこんな講演をしたんですね。大都市化で地球時代で、ふるさとがなくなっていくんじゃないか。そういうときに、自分が愛着を持って関わることができる地域や地方を、自分で見つけないといけないんじゃないかという、そういう講演をしたんですね。そしたら、ある学生が、脱炭素化時代に、旅行を奨励するのはいかがなものかと言われて。そういうふうに考える学生もいるんだというので、ちょっとびっくりしたんですね。

きょうの僕の感想は、ふるさとということと関係するのですが、明治の頃、日本にたくさん外国人が来て、東京についてもいろいろ書いています。全く近代的じゃなくて、ひどい田舎に来てというふうに初めは失望したのだけど、だんだんそういう近代的じゃない街や地域が、とても幸せでいいんだというふうに気づいて、日本を去る頃になると、去りがたさがこみあげてきたといいます。本当に多くの人がそう書いています。

そしてまさに日本にも近代かし、競争の時代になり、昔からの民俗的よさが失われた。そういうことを、書いていたわけです。

近代というのが行きつくと、今の中国みたいになる可能性があると思います。千城一面、センジョウイチメンと読むんでしょうか。国中の都市が同じようになっていくという、すごい勢いで今、中国の開発が進んでいます。一方で、古い建物がどんどん壊されていっている。これは建築からみた一つの世界の状況でもあるわけですが、先生がローカリティーということで、不便益、無便益という言葉を使いました。

少し前になりますけれども、イギリスの文化人類学の分野で、こういう問題提起がありました。大学は公的財源が投入されるので、ちゃんと監査をして効率が良い研究をしてもらわないと困るという考え方が、世界中に広がっていった。それに対してこの人たちは反論したわけです。

彼等は、大学は費用節約とか効率を追求して研究すべきというが、そういう考え方が、本当に大学でやることなのだろうかということを、強く主張し、もっとローカリティーとかそういうものに着目しないと、地球全体がおかしくなるんじゃないかということを、論じたわけです。

今日、小林先生のお話をいろいろ聞いたわけですが、最後のスライドを拝見してなるほどと思いました。風土建築というのは、未来性もあるし、これからのふるさとを失っていく地球のわれわれにとって、とても大きい力を持っているのではないか、そういうふうに思いました。

ぜひ効率性を要求する工学部的な攻撃にめげないで、頑張ってほしいと思います。まだお若いですので、兆戦を期待します。以上が僕の感想です。どうもありがとうございます。

（了）